

第三章の抜粋

P632-633

「すでに見たように、」①産業循環の発端の時期、「恐慌のあとの循環開始期」と②恐慌後の「好転は始まっているがまだ商業信用が銀行信用をわずかしか要求しない時期」には、「貸付資本の堆積、その過剰豊富が生ずることもありうる。」

①「の場合には産業資本の停滞を表しており、」②「の場合には、還流の流動性や信用の短期性や自己資本による営業の優勢にもとづいて商業信用が銀行信用から相対的に独立していることを表している。」「どちらの場合にも」「低い利子が、利潤のうちの企業者利得に転化する部分を増大させ」「現実の蓄積過程の拡張が促進される。」

また、「繁栄期の頂点で利子はその平均度に向かって上がっていく場合にも」、「利子は上がっているが、しかし利潤に比例して上がってはいないので」、現実の蓄積過程の拡張が促進される。

633

「すでに見たように、」「貸付資本の蓄積は、少しも現実の蓄積なしに、単に技術的な手段によって、たとえば銀行制度の拡張や集中、流通準備の節約、あるいはまた個人の支払準備金の節約によって、行なわれうるのであって、これらの準備金はこうしていつでも短期間貸付資本に転化させられるのである。」

638-639

「とにかく、貸付資本の量は通貨の量とはまったく別である。」「利率の変動は貸付資本の供給によって左右される」が、「この貸付可能な貨幣資本の量は、流通している貨幣の量とは違ったものであり、またそれにはかかわりのないものである。」

641-642 恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、……

「現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期(1815-1870年)のあいだは、いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。……{このことはイギリスについては言うまでもなくただ事実上の産業独占の時代だけにあてはまる。しかし、世界市場がまだ膨張を続けているあいだは、一般に、すべての近代的大工業国にあてはまるのである。}」(大月版『資本論』⑤ P641F3-642F6)

貨幣資本の蓄積 P643-645

「貨幣資本の蓄積は、」「異常な金流入によって起きることがありうる。」(P642)

「すべて貨幣貸付資本家が行なう蓄積は、言うまでもなく、つねに直接に貨幣形態で行なわれる」「これらの貨幣資本家の蓄積源泉となる利潤は、ただ、再生産資本家に取りだす剰余価値からの一控除分ではない」

「産業循環の不況の段階で」、「国債証券やその他の有価証券の価格は下がる。」「これは、貨幣資本家たちがこれらの減価した証券を大量に買い集める時期なのである」。そして、

上がった「これらの証券は売り放たれ」、貨幣資本家の「貸付可能な貨幣資本に転化」される。「この蓄積は、再生産過程の現実の拡大に伴って信用制度が拡張されるごとに、それにつれて増大せざるをえないのである。」

「信用制度とその組織との発展につれて、収入の増大、すなわち産業資本家や商業資本家の消費の増大でさえも、貸付資本の蓄積として表されるのである。」

あらゆる貨幣は貸付資本の契機になる。

第三章の概略

すでに見たように、産業循環の発端の時期と恐慌後の好転は始まっているがまだ商業信用が銀行信用をわずかしか要求しない時期には、貸付資本の堆積、その過剰豊富が生ずることもありうる。どちらの場合にも、低い利子が、利潤のうちの企業者利得に転化する部分を増大させ、現実の蓄積過程の拡張が促進される。

すでに見たように、貸付資本の蓄積は、少しも現実の蓄積なしに、単に技術的な手段によって、たとえば銀行制度の拡張や集中、流通準備の節約、あるいはまた個人の支払準備金の節約によって、行なわれるのであって、これらの準備金はこうしていつでも短期間貸付資本に転化させられるのである。

とにかく、貸付資本の量は通貨の量とはまったく別である。利子率の変動は貸付資本の供給によって左右されるが、この貸付可能な貨幣資本の量は、流通している貨幣の量とは違ったものであり、またそれにはかかわりのないものである。

「現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期(1815-1870年)のあいだは、いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。」(大月版『資本論』⑤ P641-642)

貨幣資本の蓄積は、異常な金流入によって起きることがありうる。

貨幣資本家の蓄積源泉となる利潤は、ただ、再生産資本家に取りだす剰余価値からの一控除分でしかないが、すべて貨幣貸付資本家が行なう蓄積は、言うまでもなく、つねに直接に貨幣形態で行なわれる。

産業循環の不況の段階で、国債証券やその他の有価証券の価格は下がる。貨幣資本家たちは、これらの減価した証券を大量に買い集め、そして、上がったら、これらの証券は売り放たれて貨幣資本家たちの貸付可能な貨幣資本に転化される。

あらゆる貨幣は貸付資本の契機になる。信用制度とその組織との発展につれて、収入の増大、すなわち産業資本家や商業資本家の消費の増大でさえも、貸付資本の蓄積として表されうるのである。

貸付可能な貨幣資本の蓄積は、再生産過程の現実の拡大に伴って信用制度が拡張されるごとに、それにつれて増大せざるをえないのである。

第三章の要約と現代の私たちが留意すべき点

第三章の要約

「第三章」は貸付資本の量、「貨幣資本の蓄積」の変化の原因と結果とその影響等を考察するとともに、貸付可能な貨幣資本の蓄積は、再生産過程の現実の拡大に伴って信用制度が拡張されるごとに、それにつれて増大せざるをえないことを述べています。

貸付資本の量は通貨の量とはまったく別である。利率の変動は貸付資本の供給によって左右されるが、この貸付可能な貨幣資本の量は、流通している貨幣の量とは違ったものであり、またそれにはかかわりのないものです。

すでに見たように、産業循環の発端の時期と恐慌後の好転の時期には、貸付資本の堆積が生じ、低い利率が、利潤のうちの企業者利得に転化する部分を増大させ、現実の蓄積過程の拡張が促進されます。

貨幣資本の蓄積は、異常な金流入によって起きることがあります。

貨幣資本家の蓄積源泉となる利潤は、ただ、再生産資本家を取りだす剰余価値からの一控除分でしかないが、すべて貨幣貸付資本家が行なう蓄積は、つねに直接に貨幣形態で行なわれます。だから、産業循環の不況の段階で、国債証券やその他の有価証券の価格が下がれば、貨幣資本家たちはこれらの証券を大量に買い集め、上がったならこれらの証券を売り放って貸付可能な貨幣資本に転化させます。

すでに見たように、貸付資本の蓄積は、少しも現実の蓄積なしに、信用制度とその組織との発展につれて、単に技術的な手段によって、たとえば銀行制度の拡張や集中、流通準備の節約、あるいはまた個人の収入の増大、すなわち産業資本家や商業資本家の消費の増大でさえも、その支払準備金の節約によって、行なわれうるのであって、これらの準備金はこうしていつでも短期間貸付資本に転化させられます。

現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行きます。そして、貸付可能な貨幣資本の蓄積は、再生産過程の現実の拡大に伴って信用制度が拡張されるごとに、それにつれて増大せざるをえないのです。

現代の私たちが留意すべき点

不破さんの「第三章」の文章を「歪曲」してのマルクスの「修正」

「第三章」の要約は以上のとおりですが、ここに出てくる「現実資本すなわち生産資本および商品資本の蓄積については、輸出入統計が一つの尺度を与える。そして、いつでもそこに示されているのは、10年の循環周期で運動するイギリス産業の発展期(1815-1870年)のあいだは、いつでも、恐慌の前の最後の繁栄期の最高限が、次にくる繁栄期の最低限として再現し、それからまたそれよりもずっと高い新たな最高限に上がって行くということである。」(大月版 ⑤ P641-642)という文章から、不破さんとはとんでもない勘違い、あるいは、マルクス経済学と科学的社会主義の思想の修正を行ないます。

二一世紀になってニセ「恐慌の運動論」を発見した不破さんは、『前衛』2013年12月号で、マルクスが、「恐慌は、利潤率の低下の法則とは関係がなく、資本主義が循環的に運動してゆく一局面であること、一回ごとに資本主義の危機が深まるわけではなく、恐慌は、前よりも高い所で経済的發展が進む新しい循環の出発点になる」という資本主義観の大転換をしたと述べて、マルクスの経済学と科学的社会主義の思想の大修正を行ないます。

不破さんは、「恐慌は、利潤率の低下の法則とは関係がない」といい、恐慌によって「資

本主義の危機が深まるわけではなく」、恐慌は「前よりも高い所で経済的發展が進む新しい循環の出発点になる」と言って、「産業循環」を通じて深まっていく「資本主義の危機」を否定しますが、この不破さんの経済と社会の見方は、『資本論』で論及されているマルクス・エンゲルスの経済学と科学的社会主義の思想とを真っ向から否定するものです。「恐慌」と「利潤率の低下の法則」との関係についていえば、不破さんが「古い地層」として切り捨てた第三部第三篇を除外して『資本論』を一瞥しただけでも、「利潤率の低下の法則」のもとでの利潤率の変化が「産業循環」の各局面に作用し、「産業循環」形成の要因の一つになっていることは明らかです。また、「第二十七章」で、信用が社会的生産諸力と社会的生産の発展という「新たな社会の形成要素」の発展と「古い生産様式の解体の諸要素を促進する」といことが述べられていますが、「産業循環」の最終局面である恐慌によってそのことが白日の下にさらされ、「資本主義の危機が深まった」ことが明らかになり、繰り返される「信用」の発展と「恐慌」の繰り返しのなかで、「資本主義の危機」はますます深まっていくのです。

資本主義発展論者になった不破さんの“危機”への鈍感力

しかし、「一回ごとに資本主義の危機が深まるわけではない」、恐慌は「前よりも高い所で経済的發展が進む新しい循環の出発点になる」などとノー天気なことを言って「資本主義の危機」を見ることのできない、不破さんの「鈍感力」は、リーマン・ショックが起きたときに、『架空の需要』にもとづく生産の無制限的拡大とその破綻という過程が典型的に現われていたなどと言って、二一世紀になって自ら作ったドグマで現実の「資本」の動きを覆い隠し、ブルジョア経済学でさえ「100年に一度の危機」と色を失った資本主義の“危機”に際し、何事もなかったかのように平然と構えています。この何にも認識できない「現状認識」に基づいて、不破さんの強い影響力のもとにある「共産党」は、グローバル資本の行動とそれと並走する「架空資本」にはまったく対峙しない「暮らし応援の経済成長戦略」などという、資本主義擁護政党が国民を騙すために掲げるような「政策」を掲げて闘っています。

マルクスと対極にいる人たちさえ“危機”を感じ始めている

100年に一度の危機といわれたリーマン・ショックは、一部御用学者、一部の新自由主義者にも大きな影響をあたえました。たとえば、①言わずと知れた、アメリカで鍛え上げられたバリバリの新自由主義者であった中谷巖氏は、リーマン・ショックの年に出版した『資本主義はなぜ自壊したのか』で、依然として、新自由主義に基づくグローバル資本主義がもたらす害悪を資本主義の本質から出た必然的なものであることを認めようとはせず、日本人の古来からの（?!）考え方、行動様式、ユニークな文化伝統を生かした経済運営に活路を求め、「今こそ、人類は精神革命、価値観の転換を求められている」と言って、完全な観念論者、ユートピア資本主義者に留まっていますが、傍若無人のグローバル資本の行動を見て、資本主義経済を「悪魔の碾き臼ひきうす」とまで言い、新自由主義に基づくグローバル資本主義を徹底的に批判するまでになっています。②また、野口悠紀雄氏は、これまでの政府自民党の政策を全面否定し、一時しのぎの景気対策を批判し、外需依存・海外依存の経済から内需主導型の経済への転換を求め、それは原理的には可能であるが、政治のリーダーシップが無いから実現できないのだと言います。しかし、残念ながら、自民党の景気対策は資本(財界)にとってはベストの選択であり、国民を犠牲にして外需で儲け、

挙げ句の果てに日本がミイラ化しているのは、まさに資本主義の「原理」に基づくもので、資本の「さが」によるものであり、資本主義の世の中は氏の頭の中で作り上げられた「原理」によって動くものではないということを野口氏は理解しようとはしません。③そして、大前研一氏は、ブルジョア経済学の手法が破綻したことを認めて、日本の現況は縮み志向のためであるとし、消費者をその気にさせる「心理経済学」が必要で、需要と市場の変化を見て脈を見つめることを説きます。国の目的は「『経済のパイを大きくして国民生活を豊かにする』こと、すなわち『すべての人のグッドライフ(充足感や充実感のある人生)のため』である」とし、「『増税』『税金財源』『外国頼み』は全部ダメ」だと言い、「国民にグッドライフを届ける」ために地方債を発行して都市の再開発を行なうことと、個人は、団塊世代の使える退職金60兆円を使ってグッドライフを楽しめといいます。しかし、大前氏は、「縮み志向」になぜなったのか分からないから、「外国頼み」は「ダメ」だとは言いが、企業は新興国や途上国へ出ること、海外に活路をみだし、早く海外に出ることを勧める始末です。困ったもんだが、日本が「縮み志向」であると認識しているだけでも、不破さんよりもましなのかもしれない。

以上、リーマン・ショック前後の、三人の資本主義の擁護者たちの考えを大ざっぱに見てきましたが、ここで肝心なのは、三人とも、「現在の日本は『たちいかない状況』になっており、支配階級(資本)には解決する能力がない」と認識していること、そう認識せざるを得ない状況に日本があるということです。

そして、リーマン・ショックは、日本の金融機関には幸い深刻な影響を与えませんが、製造業に深刻な影響を与え、「産業の空洞化」した日本経済に大きなダメージを与えて、資本主義の擁護者たちの一部にもグローバル資本が支配する現代の資本主義を「たちいかない」ものと思わせるまでに「資本主義の危機が深まった」ことを示しました。

矛盾を見ることのできない不破さんの「資本主義発展論」

国民大衆がラディカルに政治・経済・生活をつかむ貴重なきっかけの時期である「危機」のときに、「一回ごとに資本主義の危機が深まるわけではない」などといって自らの任務を放棄し、「『架空の需要』にもとづく生産の無制限的拡大とその破綻という過程が典型的に現われていた」などとトンチンカンなことを言って、政府に「暮らし応援の経済成長戦略」への転換を求めて、こと足れりとする。これでは「前衛党」失格だ。

そして不破さんは、マルクスが恐慌を経て資本蓄積が進み生産力が向上することを述べると、恐慌は「前よりも高い所で経済的発展が進む新しい循環の出発点になる」とマルクスが言ったと、恐慌が「資本主義の危機」をリセットして資本主義の経済的発展をはかるための出発点でもあるかのように言います。「生産力の向上」を「資本主義の発展」に読み替えてしまいます。マルクスは、恐慌を経て資本蓄積が進み生産力が向上することを述べましたが、恐慌が「資本主義の危機」をリセットするなど考えたことはありません。

「一回ごとに資本主義の危機が深まるわけではない」と「資本主義の危機」をわきにおいて、「前よりも高い所で経済的発展が進む新しい循環の出発点になる」などと言うことは、手放しの「資本主義発展論」です。

不破さんの「資本主義発展論」は伝言ゲームで花開く

この「資本主義発展論」を一層発展させているのが、『前衛』誌上で不破さんの著書の宣伝のための鼎談に、不破さんの「介さん」「角さん」の一人として出ている石川康宏

氏です。

石川氏は「資本主義発展論」に立って、一步前に進みます。石川氏は、マルクスは「労働者の闘いの前進を」、「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因としてとらえました」と言っていて、資本主義社会の墓堀人である労働者を、「より巨大な資本主義」を「発展」させるためのアシスタントにしてしまいます。そして、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展は、直接には資本主義の枠内における資本主義の改良や変化を生み出すものですが、同時に、マルクスはそれを、未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件のけいせいとしてとらえました」と言います。「生産力の発展」を「資本主義の発展」に読み替えて伝えた不破さんの「伝言」が見事に花開きました。

まったく、恐れ入ります。昔、「民社党」という政党がありました。マルクスをこんな姿に修正した石川氏は、不破さんと並んで「民社党」の理論的指導者になれること、間違いありません。

石川氏が言っていることの本当の意味

私は、「第二七章」のところで、マルクスは、「新たな社会の形成要素」として「社会的生産諸力と社会的生産の発展」を捉え、「古い社会の変革契機」として「私的資本主義的生産をもたらす様々な矛盾と労働者階級の運動の前進」を捉えていたことを紹介しました。石川氏には「マルクスのかじり方」というようなタイトルの著書がありますが、石川氏は、「こうした闘いの積み上げ」とか「資本による生産力の発展」とかいう言葉を散りばめて、「未来社会を手前に引き寄せる新しい歴史的条件のけいせい」という何となくマルクスが言っているようなゴールにたどり着き、なんとなくマルクスを「かじった」かのように見せたかったようです。

しかし、マルクスが言っていることと石川氏が言っていることは、似て非なるものどころか、まったく違います。

私も石川氏の立場に立って、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展」という奇妙な文章に関して、整合性をもった一つの考えになるよう、一生懸命考えてみました。その結果、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展」という文章は、——「労働者の闘いの前進」が「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因」なのだから——「こうした闘いの積み上げ」はより一層「より巨大な資本主義の発展をもたらす要因」となり、「資本による生産力の発展」はさらに「それを乗り越える」という、スーパー「資本主義発展論」であることが分かりました。つまり、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展」という意味不明な奇妙な文章の意味は、「資本による生産力の発展」によって労働者の「こうした闘いの積み上げ」を「乗り越える」という意味だったのです。「資本主義発展論」もここまでくると、「お見事!!」としか言いようがありません。

ところで、本来、「こうした闘いの積み上げとそれを乗り越えようとする資本による生産力の発展」という「文章」は、まったく文章になっていません。「こうした闘いの積み上げ」は「乗り越える」ものではありません。「こうした闘いの積み上げ」た成果は、経済的には搾取の度合いを軽減するもので、資本家からみれば利潤率を低くするものです。この労働者の成果を奪うものは、不破さんが無視した「第一四章」で述べられている「利潤率の傾向的低下の法則」に「反対に作用する諸原因」です。だから労働者はこの「反対

に作用する諸原因」をしっかりと見抜き、それと闘わなければなりません。「生産力の発展」と利潤率を低くするマルクスのいう「反対に作用する諸原因」とを混同すると、ラダイトになってしまいます。石川氏には、本当に科学的社会主義の思想の学徒であるならば、他人に「マルクスのかじり方」を説教するまえに、もう一度ゼロからマルクス・エンゲルス・レーニンの著作を学び直すことをお勧めしたい。まだ若いのですから。※石川氏の謬論の詳しい内容は、[ホームページ 4-22-2](#)「☆石川康宏氏は、唯物史観を認識の中心に据えるべきではないのか(その2)」を、是非、参照して下さい。

資本主義の見方も、革命の見方も変わった不破さんの「変身」

このように、「資本主義発展論」に立った不破さんは、「ここでは、もう資本主義の見方も、革命の見方も変わっているのです」とマルクスを修正し、『賃金、価格、利潤』の要点の修正から始まって、日本共産党の毛沢東盲従一派との闘いの輝かしい歴史すら修正してしまいます。※詳しくは、[ホームページ 4](#)「不破さんの思い違い」の各ページを、是非、ご覧下さい。